

遠氏これと後代にけりよちりひらへり  
と上板引いさしと老ありし一板引に  
先か一と後代の争別之本せり先  
と先ちをいさしと板引也長板引との  
りさしにさしと老ありし一板引に  
さしとさしとさしとさしと

安永九年庚子十月十八日

伊勢平藏貞文書

押字考

伊勢平藏貞文著

和漢押字、夏白石翁ノ同文通考ニ其説ヲ

盡セリ今更ニ何ヲカ云フニ然レ少思フ所ヲ

左ニ記ス

押字由来 同文通考曰異朝ノ押字、天子ノ

詔ヲ畫諾ト云フヨリ始レリト云ニ此説通

雅ニ見ユ凡諸侯ヨリ奉ル所ノ議奏ニ

天子自ラ諾ノ字ヲ草書ニテニルニ賜ル



ヲ畫諾トハ云也吾朝ニモ古ヨリ天子詔勅ニ  
御畫ト云吏アリニハ其由テ来ルハ  
久ニキ吏ニヤ貞丈曰御畫トハ大政官ヨリ  
詔書勅書等ヲ書テ御覽ニ備ヘ奉ル  
時天子筆ヲ取テ其書ノ年月ノ下ニ何日  
ト書加ヘ給フト之又其書ニ依テ可ハ字  
ヲ書又聞ノ字ヲ書給フトモアリ其法  
式ハ公式令禁秘抄等ニ見タリ又聖武天

皇天平感宝元年閏五月廿日佛事ノ勅書ノ  
模写ヲ見レハ年号ノ上ニ勅ノ字ヲ書給  
ヘリ是又御畫也又橘諸兄藤原豊成大僧  
都法師行信ノ連署アリ何レモ位署ハ他筆  
ニテ名ハ少シ大字ニテ自筆ト見ユ又東大  
寺所藏ノ古文書ノ模写ヲ見レハ貞觀  
年中ノ文書ニハ押字無之ニテ是モ位  
署ハ他筆ニテ史官ノ名ハ自筆ト見ユ



辨官ハ名ヲ書スニテ 姓ノ下朝臣ノ二字  
ヲ少シ大宇ニ書ケリ是 自筆ト見ユ是ホ  
自筆ヲ以テ證トスル一 畫諾御畫ト一意  
也是等ノ事 轉變シテ 終ニ押字出来ルハ三  
聖武天皇勅書寫 文詞畧之

天平感寶元年閏五月廿日

勅

貞文云勅ノ字御畫也

定王云師字如何疑師字歟

勅正一位行左大臣兼大宰帥橋宿禰

諸元

右大臣從二位藤原朝臣

曲之成

大僧都法師行信

貞文云石三人名自筆ト見ク

東大寺古文書寫 文詞畧之

貞觀十三年八月十七日正六位上行左少史伴連貞宗



叅議右大辨從四位上藤原

朝臣

自又云此時代未有押字只名ヲ自筆ヲ以テ書加ル也史官ハ名ヲ書キ辨官名ヲ不書ニテ朝臣ノ二字ヲ書ク是押字ノ所萌也

貞觀十三年閏八月十四日左大史六位上坂上宿禰其乃文

叅議右大辨從四位上藤原朝臣

同上

貞觀十八年二月廿日右大史六位上清江宿禰貞直

從五位上守左少辨兼行東宮學士橋朝臣

漢土ノ押字ノ始詳テラス欵同文通考曰ク

東觀餘論ニ唐ノ文皇群臣ノ上奏真字

草書其用ル所ニマカセラルタ、其名ヲハ

草書ヲ用ル下ヲ得ス其後貞文云此其後ト云解何ノ時欵未詳

竹書ヲ用テ名ヲ記ス下ニナリテフレラ

花押ト名ツケタリ草隲カ五朶雲體ト

云是也此事ノ始ハ久シキ下ニヤ梁ノ御

府ニ収ムラレシ魏晉ノ法書ヲ見ルニ

皆コレ朱異排懷珍等カ名ヲ其首ト



尾ト紙縫トノ間ニシルセリ是ヲ押縫トモ  
押尾ト云ケリ後ノ人ノ花押ハ草書ヲ以テ  
其名ヲ記スユヘキ押字ト云フ蓋古ノ押  
縫押尾等ノ躰ニヨレルナルヘシト見ヘ  
クリ宋ノ石林ノ葉氏カ燕語ニハ唐ノ代  
人初ハイマク押字ト云フアラス唯其  
名ヲ草書ニ記シテ私ノ記トナセリ  
夫ヲ名ツケテ花書ト云草陟カ五雲體

是也今ノ人ハ字ヲ押ニ或ハ名ヲモ押ス  
王荆公ハ石ノ字ヲ押スニ始ニ一畫ヲ横ニ  
シテ左ニ脚ヲ引キ中ニ一ノ圈ヲナサレ  
シト見タリ王安石字介甫  
荆公ニ封セラレ又同代ノ張湜カ雲  
谷雜記ニモ唐ノ世ヨリ我國ノ初ニ及テ人  
アタフル書牘ニ名ヲ押シ字ヲ押ストニ  
テアリシ上表ニモ又カクノ如シ今名ト  
字トヲ用ヒスニテ別ニ形模ヲナスハ然ル



ヘカラスト見タリコレノ説ニヨラハ  
或ハ名ノ字ヲ用ヒ或ハ字ノ字ヲ通ニ用  
ヒシタルヘシサレト范石湖カ詞ニ古今  
字ヲ押ス是ヲ花押ト云印ハコレ名ヲ  
用フ前輩ノ簡帖ニ前面ニ名ヲ書シ其  
後ニハ字ヲ押スト云シヨシ周密カ癸辛  
雜識ニ見タレハモトハ是字ノ字ヲ用ヘキ  
更ニヤ宋ノ祖擇之ノ押字ハタバ一口ノ字

用ヒラレシヲ或人問ニ口無擇言ト答  
シ下江隣幾雜誌ニ見ユコレハ雲谷雜記  
ニ所謂名ト字トハ用ス別ニ形換ヲナセ  
ルナルヘシ

吾國ニテ押字ヲ用ヒ始シテ國史令式ニ  
見サレハ其始詳ナラス同文通考ニモ  
見エス或曰夜鶴書札抄ニ振シテ判形  
平ノ良時人皇五十五代宇多院御宇



仁和元年將軍ノ宣旨ヲ蒙リシ時刊  
形ヲ始夕リト貞文云此説信ニ難シ五  
十五代ハ文徳天皇也宇多天皇ハ五十  
九代ニ宇多院トハ宇多天皇ノ丁カ此  
時未有院号仁和元年ハ五十八代光孝  
天皇ノ代也石ノ如クナル説取ニ足不業  
スルニ東大寺所藏ノ古文書ノ換写ニ  
五十六代清和天皇貞觀年中ノ文書ハ

押字見エズ既ニ前ニ記ス六十代醍醐天  
皇昌泰年中ノ文書六十一代朱雀天皇  
天皇天慶年中ノ文書ニハ押字アリ是ヲ  
以テ考レハ貞觀以後昌泰以前ノ間ニ押  
字始リシナルヘシ貞觀元年ヨリ昌泰  
元年マテ四十年ノ間也

東大寺古文書寫 文詞畧之

昌泰元年七月八日左大臣六位上家原朝卜良君心



從五位上守右少辨兼右太皇太后宮高麗原朝臣

定三云  
行狀

貞又云名ノ下ニ押字  
有良房ハ名ナルヘシ  
居歟

貞又云辨官ハ名ヲ記サスニテ朝臣ヲ  
押字トス下皆同之是押字ノ始ナル時

日リ例ナリ

六段出喰ルニ 貞又云同右有六名ニシ

同上

昌泰三年九月一日正一位上行右少史御船宿祢

有一乃宗

遣唐副使從四位下守左大辨兼行式部大輔行從文章博士紀朝臣

同上

天慶六年八月廿二日從五位下行左大史兼丹波權介

尾張宿祢之孫

貞又云是ハ尸ノ下ニ  
押字アリ 名ヲ書ス

從四位下行右中辨藤原朝臣

天慶六年九月廿二日從五位下行左大史兼丹波權介尾

張宿祢之孫

貞又云同上  
押字ヲ改タル歟

從五位上守右少辨菅原朝臣



押字トハ名ヲ書クトハレ正字ノ正躰ヲ省  
略シ草書ノ法ヲ以テ字躰ヲ異録ニ作り  
タルモノ故書字ト云スシテ押字ト云也  
又花押トハ字ヲ草法ヲ以テ省略シテ  
形ヲ作り其躰花文ヲナスカ故也ハヤ  
カニカガル意ニ極スルニ押字ニ五躰アリ  
曰草名躰曰二合躰曰二字躰曰別用躰曰  
明朝躰也五躰左ノ如シ

草名躰 吾国ニテ押字ノ草名正名ノ字  
ヲ大ニ省略シテ草ニ書故也吉部祕訓ニ報  
牒可加草名近代真名也又云吉書ノ  
署ノ夏中少辨次第云内案加真名正  
文加草名又官職高兼右御者難義ニ惣別判ヲハ草  
名ト申ス也名乗ノ二字ヲ崩シテ草ニ  
シタル物ニ何草名ト申スカ本ニト云ヘ  
ル是也又石林燕語ニ所謂花書ノ類ナル



音

大江匡房ノ押字ニ  
匡房ノ二字也  
古押譜

長

世尊寺中將行房押  
字ニ行房ノ二字ニ  
花押藪

美

三條太政大臣實行公押  
字也實行ノ二字也  
花押藪

涉

東福寺師鍊ノ押字ニ  
涉源ノ二字  
花押藪

男

日野大綱言將光ノ押字ニ  
時光ノ二字也  
花押藪

島

花山院大綱言忠輔卿ノ押  
字ニ島ノ二字  
續花押藪

名

海住山參議長房卿ノ  
押字也長房ノ二字ニ  
同上

加

左馬頭源義  
朝ノ押字ニ  
胡ノ二字ニ大ニ  
省略

鶴

後小松院ノ御押字ニ御諱  
幹仁幹仁ノ二字ニ  
古押譜

二合躰是ハ草名ノ躰一轉シテ二字ヲ左右ニ  
並ハテ點畫ヲ交錯シテ一字ノ如ク作ル也  
然レハ二合ト云ハ押字ノ事ニ爰ニ一ツ紛ラハ  
シキ事アリ 弘安礼節ニ二合トアルハ押  
字ヲスル事ニハアラス 被管人或ハ家僕等  
アタウル書ニハ押字スヘキ處ニ押字ヲハセス



シテ二合ト書テ與ル也是ハ押字ヲスル程ハ  
度ゾト云意也此輩官職難義ニ見タリ二合  
トハ押字ノ下ニル故押字ヲ畧シテ二合ト書  
テ與ル也

津守國長ノ押字也  
必長二字也

花押藪

三條太政大臣公房公ノ  
押字ニ分ノ二字ニ  
續花押藪

有栖川幸仁親  
王ノ押字也  
幸仁ノ二字也  
續花押藪

實相院義延法  
親王ノ押字也  
義延ノ二字也  
同上

一字跡名ノ一字ハカリヲ  
押字ニ用ル也石林燕語ニ所謂王母石ノ  
押字ニ石ノ字ヲ用ヒ三類也俗ニ是ヲ二別ト云蓋ニ合ニ對シテ云歟

萬里小路孝房卿ノ押  
字也房ノ字也  
續花押藪

鷹司關白房輔公ノ押  
字也房ノ字也  
同石

聖護院道祐  
法親王ノ押字  
也道ノ字也  
同上

同石

同石



別用躰名ノ字ヲ用スシテ別ニ形ヲ作テ用ル也雲谷雜記ニ所謂名ト字ナトヲ用スシテ別ニ形換ラハスト云ヒ又江隣幾雜所謂宋ノ祖釋之カ押字ニ一ロヲ用ニ類也

木曾義仲ノ押也  
花押藪

三好政康号釣閑奇ノ押也  
古押譜

建長寺梵仙ノ押也  
花押藪

熊谷直實ノ押也  
同上

魚倉惟康親王ノ押也  
同上

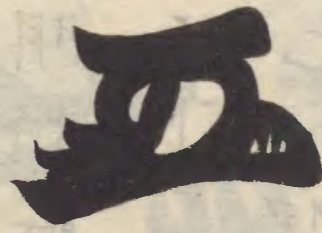
宮崎之存ノ押也  
同上

今出川公行公ノ押也  
同上

明朝躰 秉燭譚曰今時ノ人花押ノ上下ニ一文字スルノ明ノ太祖ヨリ始ルヨシ先人伊藤仁奇ヲ云ナリ物語了レ何ニ出ルト云ナリヲ語リヲカス 近比羣談採餘ヲ見レハ弟ニ卷ニツノ事アリ 國朝押字之製上下多用ニ一畫益取地平天成之意ト云々此外ニモツタ本書アルヘシト貞丈花押藪同續編古押譜等ヲ見ルニ押字ヲ上下一畫



ヲ置タルモノ天正年中ヨリ以来ノ花押ニ見エタリ名ノ字ヲ用スシテ上下ニ一畫ヲ置テ其中間ニ種々ノ形ヲ作ル也是古代ノ押字ノ躰ニ遠サカルト甚ニ今世此躰盛ニ行ハル



後水尾院ノ御押也  
此外天正以來ノ花押上下ニ一畫ヲ置ク者  
枚挙ニ遑ラス今盛ニ行ル躰ナル故多ク  
寫出スニ及ハス畧シ

石押字五躰ノ目古人イマタ云ハザル所貞文新ニ是ヲ分別スル者也

花押ノ上ニ名ヲ書ザルト古法也南流別

祖徠著

志ニ曰花押ハ名ヲ草書ニ書タル也花押

ノ上ニハ姓ヲ書トタルヲ今ノ世誤テ名ノリ

ヲ書也庭訓ナト見ルヘシ今世ハ奉行

ノ輩面々ニ私印ヲ用ユ官印ナキ故ニ

古ハ官印一官府ニ一ツテラテナシ是ヲ



月日ノ下ニ押テ面々ノ花押ニ官ノ文書ハ  
ミナ物書役ノ書トニテ名ノリ斗ヲ面々ニ  
草ニテ書ヲ花押ト云也同文通考曰古  
ノ人ハ判ヲシルナル時ニ又名ノ字署セラ  
ル事ハトカリキコレ判ニハ名ノ字ヲ用  
ヒラレシト云ト一ツノ證トヤ云ベキ  
花押教  
ヲ按スル  
源義仲朝臣平義時朝臣判ノ上ニ  
名ヲ署ヒラル其餘ニ見ル所ナシ  
近キ代ニ至リテハ  
判ニ其名ヲ用ルト云トモナリ又判ノ上名ヲ

署スル更ニ成タリ世ノ末サマニナレルニ随ヒ  
テカ、ル事モ其故實ヲ知ル人マレニ成リシ  
ニヨレルナルヘシ貞丈按前ニ画ニ出ス所  
ノ東大寺ノ古文書ノ中昌泰年中ノ  
太政官ノ牒ニハ大史花押ノ上ニ名ヲ書タリ  
花押ノ躰モ名ノ字トハ見エズ其比近キ世ニ  
異朝ノ風ヲ移シテ花押ヲ用ルコトニハ  
成リケレト花押ハ名ノ字ニテ作ルト云



下イマタ知レス花押ノ上ハ名ヲ署スル  
ニ及バスト云テモイマタ知レサリシ故ナル  
ヘシ後ニ其事詳ニ知レタリシヤ天慶ノ  
太政官ノ牒ニハ大史名ヲ署セスニテ姓尸ノ  
下ニ花押ヲシタリ  
押字ヲ俗ニ判ト云テ同文通考曰是ヲ  
判ト名ツケシテモ其義詳ナラズタシ  
有司ノ判署スル所ナレハ斯名ヅケシヤ

アラニ兼燭譚曰カキ判ヲ花押ト云又  
押字ト云日本ニテ判ト云ハ  
誤ニ判ト云ハ奉行役人ナトノ下へ出ス  
裁判カキ也スニ状ナトモ云判断ノ意ニ  
文ノ一辭ニ判語ト云アリ其判ニ花押ニ  
タルヲ五花ト云故事アリ其ヨウナル  
下ヨリ轉ニアヤマルニヤ貞文曰押字ヲ  
俗ニ判ト云テ近世ノ事ニアラス昔ヨリ



云ニ也宇治大納言隆國ノ今昔物語  
曰今ハ昔或人夏比ヨキ瓜ヲ得タリケレ  
人ニ贈ラニトテ十顆ハカリヲ厨子ニ入テ  
此瓜不可取ト云テ出ニケリ然所ニ阿字  
托ト云七八歳ノ男子竊ニ厨子ヲ開キ  
テ瓜一顆ヲ取テ食ケリ夕方ニ及テ親  
歸リテ厨子ヲ開キ見ルニ一顆失ニケリ  
是ハ誰取タルゾト尋ルニ家内ノ者トモ

我モ取ズクトアラフソイアイタリ正シク  
此家ノ人ノ口サニ外ノ人ノ来テ取ヘキニ  
アラズトハシタヤクセメ問フ時或女晝  
見候シハ阿字托ヨソ御厨子ヲ開キテ瓜  
一ツ取出シテ食ワレト云父是ヲ聞テトモ  
カクモ云ズ其所ニ住ケルオトナシキ人  
ヲアマタ喚集メケリ家内ノ者托コハ  
何故ニ喚タマフニヤト思フ程ニ郷ノ人



喚集テ父瓜ヲ取タル見ヲ永ク勘當ニ  
テ此人セノ判ヲ取テ判スル者トイコト  
ルトフト問ヘハ思フ所侍ルト云テ判ヲ取  
ケリ家内ノ者ト是ハカリノ瓜一顆ニ  
子ヲ不教スルトヤアルベキ物狂ハシキ  
率カトトイヘト聞入レズシテヤコニケ  
リ其後年月ヲ経テ不教セラレタル  
見成人ニ元服シテ然ルヘキ所ニヤ仕ヘシケ

程ニ盗シテハ捕ラレテ問ハルニシカ  
シカノ者ノ子ニト云ケレハ檢非違  
使別當ニ其由ヲ申ス別當廳ノ下部  
ト具シテ此冠者ヲ先ニ立テ父カ  
家ニ行テ此由ヲ云テ追捕セニトス父カ  
云ク是ハ我子ニアラス不教ニテ數  
十年ニ成ヌト申ス廳ノ下部ト用ヒ  
ガシテ怒リ罵シリケレハ父ソコタナシ



此事ヲ虚言ト思ハ、其證ヲ見スヘシトテ  
在地判ヲ取タル文ヲ取出シテ下部ニ  
見セカノ判シタル人ニヲ喚テ此音ヲ  
云ヘ判シタル人ニマサシク先年カ、  
ル事アリキト云下部歸テ檢非違  
使ヲ以テ此由ヲ申セハ別當ケニモ父  
ハ知ルマジト云テ冠者ヲ獄ニ禁セ  
ラレケリ父ハ更ニ事ナソヤマニケリト

此文ヲ見レハ昔ヨリ俗ニ判ト云来レリ  
昔ヨリ云来レルトナレ判ト云ハ誤  
ナルベシ近世ニ印ヲ判ト云ヒ押字  
ヲ書判ト云亦誤ナリ  
近世花押ニ穴ノ數ト云フヲ云出シテ  
上性ノ人ノ判ハ一穴火性ノ人ノ判ハ三  
穴ニ作ルト云フアリ又病身ノ人  
判ヲ改メ易ヘテ無病ニ成タルト云又



立身ヲセサル人判ヲ改メ易ヘテ  
身ニタリト云類世ニ多シ甚愚ナル  
判ハ前ニモ記ス如ク我名ノリヲ草書ニ  
省畧シテ書タルトアレハ性ニ合フ不合  
ト云トハ十キトニ穴ノ數ニ拘ルトモ十キ  
トニ判ニ因テ禍福ヲ招クトモ曾テ十  
キトニ今世押字ノ故實廢レテ上下ニ  
一畫ヲ置テ其中間ニ據モ十キ形ヲ作

ルヨリシテ穴ノ數ヲカグヘ性ニ合フ不  
合ト云ヒ吉凶ヲ云フ事ニ成レルニ判ノ  
墨色ヲ見テ吉凶ヲ占フト云トヤト  
モ判ニ限リタルトニハアラズ一文字ニテ  
モ一圓相ニテモ何ニテモ墨付タルヲ  
見テ占フトアレハ判ニ吉凶ハ十キトニ  
判ヲ木ニ刻ミテ用ルヲ元ハ十キトニ  
同文通考曰元ノ時ニ及テ蒙古色目ノ



人ヲ官トナリシガ多クハ筆執ルヲ  
得サレハ象弁スハ木ヲ以テ花押ヲ刻  
ミテ用タリ宰輔トヨビ近侍ノ官ノ  
一品ニ至レル人別ニ勅旨ヲ得テ玉ヲ  
以テ刻ミテ用ヒシ按スルニ後周ノ廣順  
二年平章車季穀臂ヲ病テ其任ヲ  
解シケルニ太祖詔シテ名ヲ刻メル印  
ヲ用ヒシメ給フト云フアリコレ押字ヲ

刻メル印ヲ用ルノ初ナルヘシト鞍耕  
録ニ見ヘタリ又曰近キホドハ世ノ人事  
グサシゲクナリユクマハ自ラ判ヲ署  
スルニ堪ズシテ多クハ其形ヲ木ニ刻ミ  
テ用ルトナリタリ此物モト自署ス  
ルヲ得テ其信ヲ示スベキ所ナルニ  
斯具本ヲ共ヘル事クタル世ノ俗誠  
スクナキカ故ニヤアルヘキト貞文



印モ花押モ共ニ文書ノ信ヲ示シ證ト  
スヘキカ爲ノ者ニ其中ニ印ハ彫刻スル  
物ナレバ實物ヲ作ルトモアルヘシ花押  
ハ各自書物ニテ各手癖アリテ其書  
躰佗人似セルトナルヘカラズサレバ花  
押ハ物ノ證トスルニ至テハ印ヨリモ勝  
レル者ニサレハ押字ハ其躰ノ筆勢墨  
色等ニ自心覺ヲシテ書ヘキト今世

如ク上下ニ一畫ヲ置タル判ヲ濃キ墨ヲ  
以テ光ルホドニ塗リツクロヒタル者ハ  
實物出来マシキ者ニモアラス或人花  
押スル度ゴトニ花押ノ中ニ細キ針ニテ  
穴ヲ突アケテ置シカ後ニ實書ニ我  
花押アリテ罪科免レ難カリニ時カノ  
針穴ノ無リニテ以テ實書ナル由ヲ云ヒ  
開キ罪ヲ免レシト云フトアリ針穴



コノアケマシケレ花押ノ點畫ノ中ニ他  
人ノ心ツカサル所ニ三箇所モ驗ラシ  
テ書覺ホクヘキト之上百ハカ、ルトモ  
十ケレモ末ノ世ニ至リ姦曲多キ時代ニハ  
印モ花押モ贋物アルトレハカ子テ人知  
レス用意スベキ事也

安永三年甲午九月廿三日

江府扈從隊士伊勢平藏貞文書





